

テーブル連続小説

ファースト・ラブ

第9話・永遠の愛

初恋の話なんて、いまさら面白おかしく話す自信なんてなかった。あの頃の僕の若さを誰かに笑われるのも癪だし、秘めたまま美しく腐らせていきたい気持ちを理解してほしかった。

「で、その時は結局誰を選んだの？」

無邪気に笑う君にこの気持ちなんてわかってもらえそうにないけど、はぐらかした口調で逃げ続ける僕。きっと打ち明けるまで離してくれそうもない。

「こんな話、楽しい？僕の初めて好きになった子は、とか、初めてのデートは、なんてさ。今を大切にしようよ」

「それはもちろんそうだけど、過去だって大切よ？」

全く、女の子という生き物は恋の話が大好きか。

呆れ顔の僕なんて目に入らない君は、持論を得意げに語り始める。

「だって、あなたが初めて出会った車がデリカじゃなかったら……きっと私と出会わなかった気がするの。だから知りたくて。初めて好きになったデリカシリーズを」

やっぱデリカか。僕は笑う。

「何で笑うの？」

「別に、デリカファンじゃなくなったって君とは出会ってたよ。だって僕は、今のデリカが好きだから……発売十周年、おめでとう」

黒い車体に光るデカールが、一層誇らしげに見えた。一人のときも、家族のときも、僕が好きなのはデリカD5。

「もし……もし私が生まれ変わっても、また傍にいてくれる？」

「当たり前だよ」

デリカがこの世に生まれて四十八年。僕がいなくなった後もその名前が永遠に続けば良いな、なんて大げさなことを考えながら、新しい大切な愛車・十周年記念のシャモニーで走り出した。

つづく

誰よりも大切なあなた。

あなたに会いたくて、帰って来た。



鐘を鳴らして。

北海道三菱の

冬旅フェア

11月23～25日・12月2～3日

開催中

